

ゴツアイダंक： 学力低下論の影響

浅沼 茂 (全国個性化教育研究連盟副会長・東京学芸大学教授)

県教育センターなどからの最近のリクエストは、習熟度別指導と小人数指導が実に多い。昨年までは、総合的学習の時間をどうするかという話が多かった。不思議な話である。国の方針は、新学習指導要領とは、まったく反対方向の基礎学力向上に向かっているとでも言わんばかりの大転換である。この動きは、新学習指導要領での教育評価をどうするのかという行政的な対応をはるかに先取りしてのことである。評価規準や評価基準の話は、もう書類上のことと割り切っているようにも見える。マスコミをはじめ、世間はアチーブメントテストの結果が評価のすべてであるとも言っているようでもある。塾・予備校を初め教育産業は、ここが稼ぎ時とばかりに大はしゃぎである。

県レベルの教育リーダーは、「機を見るに敏」である。かつて、1980年代に高校多様化路線のステレオタイプを抱いて有名な富山の高校の七三体制はどうなっているのかなどと調査に行ったら、この数字の内容が逆転していて普通科七に職業科三の割合であった。

学力向上運動の救世主は、百マス計算と習熟度別指導のようである。習熟度別指導など小人数の分け方、それぞれの指導の仕方のような技術的なことへの関心が教師の間では非常に強い。他方、高校の教師は自信がないのか、都立の高校では、予備校の講師に子どもを預けるようなことまで平気でしている。つい、この間まで、話題となっていた総合学習をどうするかなどということは、遠い昔の話のようである。受

験勉強があるからという一言で教育目的のすべてはそこに集約されているとでも言わんばかりの勢いである。不思議な現象で、日本は、始まったばかりの新学習指導要領の下、かつて以上に一億総百マス計算に向かっているようにも見える。新聞の大きく登場する百マス計算の広告文には、蔭山氏の本 250 万部突破とある。恐ろしい数である。日本の小中高の教員数はたしか約 95 万人。これは、教員一人が平均 2.5 冊買っているか、あるいは一般の人が多く買っていることを意味している。一般の人が買う教育書って何か。『窓際のトットちゃん』なみかな、と思ったりする。

教育上のダイナミズムはいつの世にもあることで平家物語ではないけれど栄華盛衰必然の掟かもしれない。問題は、教育界のこのような盛衰が本当にその教育の真価をめぐって波の頂と谷間のように上下しているのか、どうかという評価である。つまり、事実として源平合戦のように貴族社会から武家社会へというようなパラダイム転換があったのかどうかである。あるいは、教育界では常に表層と深層があり、表層の表皮の部分の部分が常に生え替わっているだけなのか、この辺はなぞである。言えるのは、総合学習は、栄華を極めてはいないということである。平家の落人ではないけれど、総合学習はまだ地味で希少価値をもっている。逆に目立たないけれど神秘的な光を放つ珠玉の総合学習の実践の方が有り難みがあって、それも良いかなと思うこの頃である。

第19回 全国個性化教育研究連盟

夏季研修会

学校教育の『変革・再生』を実現するために
—直面する難題・課題を超克し、学校教育を
変革・再生しうる『スピリッツ』とは?—

【期日】平成15年7/31・8/1

【場所】上智大学7号館14F

〈第1日〉

◎開会行事

講師紹介・研修会の趣旨

大磯町教委指導主事 池田伊三郎先生

◎基調提案

「総合学習による高校教育の変革」

千葉県立小金高等学校 川北裕之先生

◎講演①

『学校教育の”変革・再生”と

「人間力」の育成』

立教大学教授 奈須正裕先生

◎特別講演

「授業で学校を変えるには？」

—世界で一番受けたい授業「よのなか科」—

東京都杉並区立和田中学校長

(前リクルート社フェロー) 藤原和博先生

◎分科会別協議会

A分科会

「評価・「学力保障」問題と学校の役割」

B分科会

「総合学習とカリキュラム・授業づくり」

〈第2日〉

◎講演②

『学校教育の”変革・再生”を
実現するために』

上智大学教授 加藤幸次先生

◎シンポジウム

『学校教育の変革・再生を
実現するための視点と方策』

パネリスト

上智大学教授 加藤幸次先生

東京学芸大学教授
立教大学教授
教育ジャーナリスト
コーディネーター

浅沼 茂 先生
奈須正裕先生
梶浦 真 氏

大磯町立国府小学校長 河合剛英先生

◎閉会行事

第1日

◎基調提案

「総合学習による高校教育の変革」

千葉県立小金高等学校 川北裕之先生



千葉県立小金高等学校の総合学習は1994年のピオトープを作ろうとする計画から始まる。生物Ⅱ(選択)の「環境学」などを経て、現在のカリキュラムにいたる。

小金高校の総合学習の柱は「ディベート学習」と「個人研究」である。その中で特筆すべき点は、生徒の代表と保護者の代表、教員で話し合いをもつ「三者会議」であろう。

教育活動について保護者の意見を聞くことはあるが、小金高校のように「三者会議総合学習検討委員会」というような組織を設け、授業内容まで保護者、生徒とともに考えるということは殆どないのではないだろうか。

また、高等学校の総合学習はまだ始まったばかりであるのに触発学習(アウトラインレクチャー、フィールドワーク)、ディベート学習などの学習過程をしっかりともっていることも素

晴らしい。

今回の提案にあったシンガポール修学旅行においてもコースの選定から生徒を交え決定し、個人研究のフィールドワークとして修学旅行を位置づけている。生徒が主体的に行事（修学旅行）に取り組み、学びの場としているのである。勿論、課題も残っているようで教師集団の指導力の差、触発学習の大変さ、個人研究の難しさ、修学旅行との関係の見直しなどがあげられるが、人材バンクを立ち上げたり、協力体制について検討するなどして課題の解決へ向け尽力している。

(文責・内村)

◎講演①

『学校教育の“変革・再生”と

「人間力」の育成』

立教大学教授 奈須正裕先生



「教育が日本の経済とか産業や雇用の問題と関連している」などと考えながら、毎日の授業を行っている教師はまずいないでしょう。むしろ産業界とは一線を引いて、それには屈しないぞとがんばってきたのがこの国の教師集団ではないでしょうか。ところが現実には全く状況が反転しているのだと、内閣府の「人間戦略研究会」に教育畑を代表して参加された奈須先生は、大変ショッキングな話しを始めた。

悪化した経済の中で特に若年雇用の問題が大きい。しかし「僕らが育てた子どもたちに職ぐらいしっかり用意しておいてくれよ。」と他人

事みたいなことを言っている場合ではなさそうである。問題は、若者たちが自分らしい生き方を求めることに不慣れであることにある。この国の教育は今まで進路選択能力の育成に目を向けてこなかった。キャリアアップの道筋を探す（設計する）能力や、自己モニターしたり制御する能力の育成が、カリキュラムから欠落していたことは学校教育の責任である。

学校歴と職歴などの社会体系的な地位がきれいに結びつき、入試への投資効果がしっかり効いていたのは過去の事となってしまった。「将来（入試に）困るよ」という脅しはもう効かない。として学校教育の“変革・再生”と「人間力」の育成のために、ここでつぎの3つのことを提言された。

- ①カリキュラムの中に進路選択能力の育成を取り入れなければならない。
- ②世の中の中で、自分の位置を見つけることや、日々のくらしがどう動くのか、変革するにはどうするのか、振り返ってどうするのかといった「内容的な学力（生活していく力・自己を見つめる力・自分をつくる力など）」を大切にしたい。
- ③教師は教科学習の有用性や内在的なおもしろさで勝負したい。

(文責・内藤)

◎特別講演

「授業で学校を変えるには？」

—世界で一番受けたい授業「よのなか科」—

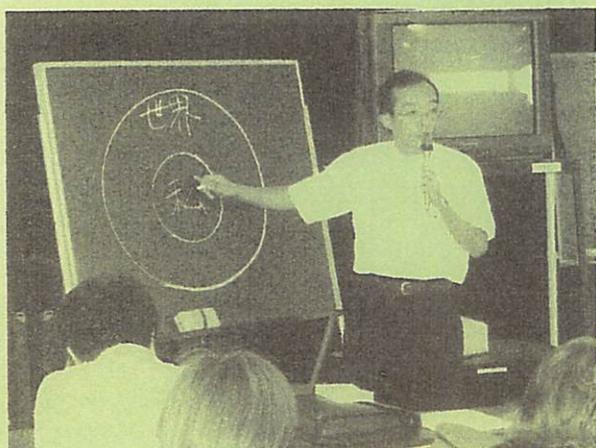
東京都杉並区立和田中学校長

(前リクルート社フェロー) 藤原和博先生

[よのなか]科は、私から世界の関わりを見させていく教育であり、世界を分断した知識の要素という形の教科書とは異なる。最初に「ハンバーガーから経済を見る」という授業を行った。個人で地図に儲かるハンバーガー店の出店地点を考え、これを基にグループで話し合い、それを発表した。次に、「家の間取りから政治を考える」実際の授業の様子をビデオで見た。

これからの教育はジグソーパズルをやる力のよ

うな「情報処理力」とともに、レゴで遊ぶ力のような「情報編集力」をつけさせる必要がある。「情報編集力」は、身近な事柄から奥行きのある学習を進める。シミュレーションやロールプレイング、ディベートを多用し、個人・グループで意見を持ち寄り、最後にプレゼンテーションを行う。専門家をゲスト招き、授業の途中はグループ指導などに入り、生徒との人間関係を作っておいて、最後にまとめの話させるとよいとまとめられた。(文責・加藤)



◎分科会別協議会

A分科会

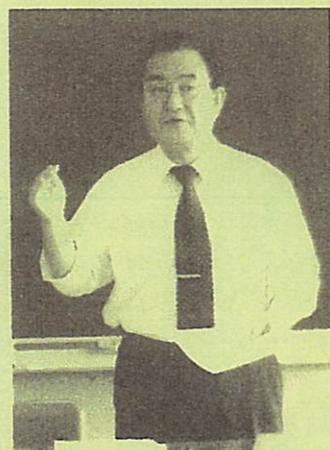
「評価・「学力保障」問題と学校の役割」

提案 愛知県大府市立大府北中学校長

成田幸夫先生

助言 上智大学教授

加藤幸次先生



学力保障と学校の在り方の問題は日常的であり、私たちが目指す理想的な学校とはどのようなものか、考える必要性がある。大府北中学校は、全校の8%強が不登校生徒という問題を抱えている。最近の不登校生徒の特

徴は、小学校でもマークされず、ある日突然不登校が始まることである。不登校生徒に対する直接的な対応としては、適応指導教室・ハートルームの開設、そこに常駐する教員を中心とした運営等、その生徒だけではなく、家庭を含めたプロフィールを把握し、具体的に取り組んできた。しかし根本的には、不登校生徒を出さない学校づくりへの取り組みが大切である。

大府北中学校では、個に応じ自己肯定感を得られるような教育課程を編成している。特色ある学びとし●ベーシック・タイム(個に応じて基礎学力を養う学び)●パッケージ学習(適性に応じた一人学び)●ドゥー・タイム(興味・関心に基づき自主参加する学び)●自分探しの旅(長期休業等を活用した体験学習のすすめ)をあげることができる。今「教育」は世間の共通の関心事である。保護者の実態と地域の役割や支援等、学校づくりに不可欠な要素は数多いことも心にとめて置かなくてはならない。

「評価」については、指導過程をどれだけ問いただしたのか、どのような学力、学習力を目指しているのか、ということの本気で考え続け、そこから学校を変えたい。(文責・植田)

B分科会

「総合学習とカリキュラム・授業づくり」

提案 神奈川県横浜市教委指導主事

斎藤一弥先生

助言 立教大学教授

奈須正裕先生



「ひらかれた学校」
・大岡小の挑戦！
は、大岡川を追究する実践を通して、学校をとらえ直すことが始められた。学校は子どもの学びを創り出すところであることを基

本に研究した。子どもの経験にひらかれた学びをすすめるために、これまでの経験則によらない学校づくりを目指し、様々な枠組みを見直し

た。そして、深め学習・はげみ学習・なかよし活動・いきいき活動の中で、子どもに必要な8つのカテゴリーの資質・能力が質的に変換することを目指して学びをつくった。このためには、素材から単元化のきっかけをつかみ、展開をデザインし、リカバリーをする「勘」、子どもの視点から素材分析をすることができる「知恵」、学びを見つめ、授業コントロールの質を見極める「技」が必要である。子どもの学びの姿から、学校改革を行うのであれば、実践を基に熱く語られた。

指導 立教大学教授 奈須正裕先生

子どもの実態から問題を感じ、現在に不満があるから研究して、学校を改革しようとしている。単元をつくっていくことが教師の仕事である。事前の単元検討会が重要である。ここで指導案が捨てられたり、大きく変えられたりする。捨てる経験がレベルを上げる。校内としての文化が教育の質を判断（教師としての直感も含む）している。この話し合いで、予想して授業を見ることができ、授業後の研究会が充実してくる。そこで、大岡小の授業研究会には、朝から参加することを薦め、話を終えられた。

(文責・加藤)

第2日

◎講演②

『学校教育の“変革・再生”を

実現するために』

上智大学教授 加藤幸次先生

「絶対評価をどのようにしていくか」を課題テーマとして、これからの評価の在り方についてお話されました。結論として話されたことは小学校では学校単位で、中学校や高等学校であれば教科で、こういう方針で評価を行っているという説明がなされればよいのではないかということでした。

実際に、今絶対評価で困っているということはない方向にあり、相対評価に戻るといふ風潮は消えている。また、「生きる力」を育てるた



めに、教育活動を四つの層に構造化し、その一つ一つの層とその評価の仕方についてもわかりやすく説明されました。

価値や態度の形成（特活・道徳）を図る第1層では学級づくりとして行動の記録で、基礎的スキルの定義を図る第2層（算数・数学、国語、英語）ではテストではかることができる。また、課題解決力の育成を図る第3層（社会、理科）ではテストでもよいが、プロセスも重視したい。問題解決力の育成を図る第4層では、総合的な学習などで関心・意欲・態度を重視したい。追究の方法でウェイトづけが違うのでテストはやらない。よって、「生きる力」とは、人間関係や価値観を基礎にして第4層が相互に支え合って形成される力である。ただ、絶対評価の在り方の中にも観点のそれぞれを重点化してのぞみたいということでした。

(文責・石澤)

◎シンポジウム

『学校教育の変革・再生を

実現するための視点と方策』

パネリスト

上智大学教授

加藤幸次先生

東京学芸大学教授

浅沼 茂 先生

立教大学教授

奈須正裕先生

教育ジャーナリスト

梶浦 真 氏

コーディネーター

大磯町立国府小学校長 河合剛英先生

現在、学校教育は歴史的な岐路に立たされ、変革・再生はこの国の生き残りの必須条件となっている。振り返れば日本は歴史上の岐路に直面したとき、自国の伝統的なものと海外の発展的なものを上手に融合させながら、この列島にふさわしい形に作り上げ切り抜けてきた。今回の



シンポジウムの適時性はそんなところにあるのか、2人のパネラーが海外の状況を紹介した。

加藤先生は、学校選択の自由はニューヨークを除いてアメリカ都市部の当たり前になっているとして、ミルウォーキーやロサンジェルスなどを挙げた。日本においても教育特区の動きを紹介し、公の中に認められてわれわれ教師や親がつくる公設民営型の学校づくりの、今後果たす役割の大きさを強調した。

浅沼先生は、19世紀末から20世紀初頭のニューヨークの教育改革の移り変わりを、取り上げた。そこでは人種・民族・階級のぶつかり合いが教育の流れをつくり、教育は政治の道具になり、子どもたちがその学校でどう育っているかは完全に無視されていた。よくも悪しくも、政治的な大きなうねりの中に教育の営みはいつもあることを認識しておかなければならないとした。

高校現場からの川北先生の発言は、学区撤廃の中で現実に学校選択を受けている立場にあって、学校改革の営みを外部の人たちにどう認めてもらおうか、同僚たちをどう納得させるかとい

ったご苦労をうかがわせるものだった。人事交流で職員が動いていく中でどうやっていいものを残していくか、他の公立高校からの厳しい目、大学入試結果だけによる評価など、さまざまな悩みを抱えながらの改革の取り組みである。

一方、ジャーナリストの梶浦さんは、「ニーズという問題」と「先生のスピリッツ」の関わり合いを見ていきたいとした。いまや親たちの目は、3Rや習熟度に急激に傾斜しているし、学校は気にしすぎて説明責任に走っている。教育の本質が求められる時代だからこそ、何を教えて何を中心に据えるか、スピリッツを大切にしていものを残していかなければならないとした。

フロアからは、学校選択や入試制度の問題や、校内コンセンサスに関わる悩みなどのさまざまな意見や、教育の世界の急激な流動性の中で今後の全個連のはたす役割への期待などが寄せられた。

(文責・内藤)

全個連ホームページのお知らせ

全個連のホームページが新しく変わりました。以下が新しいアドレスです。

<http://www.ns-da.com/aaa/zenkoren/index.html>
へアクセスを！事務局だよりや会報・会誌等の会の情報や出版物、事務局だよりや研修案内等をお知らせしております。

<事務局への問い合わせ・連絡先>

〒299-0245千葉県袖ヶ浦市蔵波台7-22-4

三浦信宏 TEL&FAX 0438-63-5319

mail:minobu@beige.ocn.ne.jp

<http://www.ns-da.com/aaa/zenkoren/index.html>

全国個性化教育研究連盟会報 第66号

平成15年9月6日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

編集 広報部 中田 泰志